
トラブルメイカー

risa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トラブルメイカー

【Nコード】

N4154A

【作者名】

risa

【あらすじ】

このストーリーは彩子という彼女の人生を綴った話であり全て実話をもとに小説にしたものです。彩子がヤンキーになり、いじめ、そしてキャバクラ、ピンサロ、闇の世界、高級クラブで働き、若くして結婚離婚をし、運命の人との出会い、別れ裏切りそして今…とさまざまなトラブルにより心に傷を追い未だ治せず苦しみもがきながら生きていく姿を、綴ったストーリーです。あなたには若さの勢いと勇気の違いがわかりますか？

第一話 咲智との出会い

人は皆、必ずいつか幸福だと思える日がくると願い生きている。
だが彼女は未だ見つける事はできない。

小泉彩子13才彼女は少し生意気で目立つタイプだが、普通の中学1年生。

ある朝、登校中に一つ上の咲智と出会う。咲智はすらっとして大人びていた。

「あんた、一つ下の小泉彩子だね？」

と咲智は彩子に声をかけた。

「はい…」

「学校終わったら、ここで待つてるから」

と言い咲智は学校へ向かっていった。彩子と咲智の出会いが始まり彩子の人生の入口が開き始める。

彩子は学校へ着き、1時間目から5時間目の間落ち着く間もなかった。なぜ呼ばれたのか予想もつかない、いけば集団リンチにでもあうのかと頭の中はマイナスだらけになる。だか行かないともっと最悪な事になる。キーンコーンカーンコーン いつも長く感じている授業が今日はやけに短く感じ、下校時刻になる。いつも友達と下校するがこの日は足早に教室を出て、門をすぎると足が重くなり気がつけばいつも以上に歩くペースは遅い。

いよいよ朝、咲智と出会ったあの場所が見えはじめる。遠目からでも彩子には咲智のうしろ姿がはっきりと見えた。

そして咲智は振り返りニコツと笑みを浮かべ、

「本当に来たんだ。来ないかと思った」

と言った。

彩子は心の中で呼んでおきながら意味わかんねーこいつと思いつつ、
「何の用ですか？今日は家の用事があるんで手短に…」

と言うと咲智は

「やっぱり噂通り生意気だ。まあいい、とりあえずついてきて」と歩きはじめた。彼女の横に並び歩いていると同級生が咲智に一礼をしながら通り過ぎていくと同時に私の顔を心配そうに見ているのがわかった。

咲智は、学校内でも少し目立つ存在だったからだ。見た目は普通だが言葉はもろヤンキー口調で下級生からは一目置かれていた。

そして交わす言葉もなく10分程歩くと彩子の住みマンションのすぐ裏にある小さな屋台のタコ焼き屋についた。

咲智は慣れた口調でタコ焼き屋のマスターにこう言った。

「この子あたしの後輩で彩子。これからちよくちよく顔出すから覚えてあげてね」

と言うが彩子は正直戸惑った。まだ咲智とろくに話しをしたこともないのに、と思いつつも

「あつどうも」

とマスターに会釈をした。

30分もたつと向こうから5人の男が歩いて来た。

見た目は学ランにリーゼントやパーマをかけて中学生で同じ学校ではないと制服を見てすぐにわかった。

そして男の一人が咲智に、

「お疲れ〜。」

と親しげに言う。咲智は次に男達に私を紹介し始めた。

「後輩の彩子だから仲良くしてやってね」

という。男達は笑みを浮かべながら

「宜しく〜」

と言った。彩子は心の中で悪い奴でもないじゃんとして少し安心した様子でニコツと笑った。

そして次の日、学校へ行くとやはり予想は的中、咲智と帰り道歩いていた事はクラス中知っていた。そして彩子の友達、由利子は心配そうな顔をしながら咲智との事を聞いてきた。

「彩子」、昨日、咲智先輩と一緒にだったでしょ？他のクラスの子から見たって聞いたけど」

「あゝたまたま話しかけられただけであの人みんなが思ってるほど悪くないよ」

と彩子は言つと、由利子は

「ならいいんだ」。あの先輩あんまり評判よくないから深入りしないようにね！気つけなよ。」

と言つと彩子は

「うんわかった」

と笑顔で言つた。

由利子は学年一モテていて頭も運動神経もよく姐御肌な性格で彩子の親友ともいえる仲だ。

そしてまたいつも通り帰宅していると昨日の場所で咲智が待ち伏せしていた。

そして会釈だけし通り過ぎようとする彩子に咲智は、

「おいっ」

と声をかけた。

そして立ち止まると、

「待つてたのに！行くよ」

と手首を掴んだ。

そしてまた昨日のタコ焼き屋に行くと昨日の倍とも言える人数の人がたむろしていた。彩子はよそよしくも輪に入り仲間達と話をしてた。そしてこの生活は次の日も毎日繰り返すようになった。そして数カ月経つ頃彩子は咲智と学校内でも会話するようになり、髪も少しずつ茶色になり制服のスカートも短くなり少しずつヤンキーの仲間入りをしていた。

第二話 別れ道

1992年春

彩子は中学二年になりますます非行への道を進み始めていた。そして梅雨になる頃、彩子はある一人の男に出会う。信吾だ。信吾は彩子より5才上の同じ中学の卒業生で年下の女の子の処女を奪う処女ハンター。見た目は可愛い顔で背も低く小柄な男で、母性本能をくすぐるタイプだ。

彩子はが友達の家に向かう途中の公園でカンツと舌を鳴らす音がした。当時ヤンキーといえばこの音が聞こえれば振り向かないやつはいないといえるほど、ヤンキーにとつての特別な音だった。もちろん彩子は振り向いた。

そして信吾は彩子に問い掛けた。「この辺の子？」

彩子は信吾をじっとみながら

「うん…」

と答えた。信吾は笑みを浮かべながら地元の話しやヤンキーグループ達の名前を次々に話した。

その中には彩子も知っている名前等があり、気がつくと思吾と彩子はさつきあったばかりとは思えないほど仲良くなっていた。そして信吾と数分間話しをし帰ろうとすると信吾は彩子に

「電話番号言っから覚えて〜」

つといい

「○○○ ××××覚えたあ？」

というと思彩子は適当に返事をし去っていった。そしてまた友達の家に着き何事もなかったように振る舞い、少し早めに遊びを引きあげさつき信吾と出会った道に向かい歩いた。（なぜだろう？さつき初めて会ったばかりなのに、もう信吾と会いたくなってる）

彩子は自分自身の気持ちに不思議に思いながらも少し浮かれながら信吾を探した。だがもうそこに信吾は居なく彩子は公園の電話BOXから信吾に電話をした。

すごく積極的な行動に内心わけがわからずにいた。トウルルルルトウルルル。コールが鳴るが信吾は電話にでなかった。彩子は電話を切り我にかえた。

それから数日が経ち信吾に会うことはなかった。

そしていつの間にか学校が終わると咲智と会い、他中のヤンキーグループ達と遊ぶ日が続いていた。

だが、彩子は咲智に対して日々不満が増していった。

「おはよう！」

咲智の声だ。また学校に行く途中で呼び止められた。

「おはよう。」

彩子は少しうかない声でいった。

「何だよ、その声後輩のくせに生意気なんだよ。今からこのままアワジにパクリツアーに行くからみんなの分もパクレよ」

咲智はやや強めに彩子に言った。

（アワジとはデパートでパクリツアーとは万引きに行くこと仲間内にしかわからない言葉だ）

「えっ、でも今日は学校に行くよ」

と彩子も強めに言い返すと咲智は強引に彩子の鞆を引っ張り学校とは反対の方向へ歩き出した。

彩子は最近、咲智の上から口調や本当はヘタレなのに強ぶる性格、一人じゃ何もできないところが嫌いになっていた。

そして渋谷、彩子は咲智とアワジに向かった。

駅のトイレで二人は咲智が用意した私服に着替えはじめた。そして開店と同時に店に入り明らかに妖しい大きな鞆に刺繍入りのブランドのスエットやジーパン等を万引きしはじめた。

だけど万引きするのは彩子の役目で監視するのはいつも咲智 だっ

た。

大きく膨らんだ鞆を持ち二人は他中のヤンキーグループのたまり場にもなっている浩二の家に行き、咲智は万引きした鞆の中身を出しいかにも自分が一人でやったかのようにまわりにいた数人の子達にあげていた。

正直、彩子は物で人を釣っている咲智に呆れていた。しかも後輩に押し付けいいとこどりをする咲智に対してコイツの後輩でいたくない。とこの頃から思いはじめていた。

もちろん周りのヤンキーグループも咲智のその性格に気付いていた。だが金や物をくれるから、誰一人咲智をグループから追い出す事はしなかった。

そんな日々が続き、彩子は咲智から距離を置き、元の生活に戻りはじめた。

そしてまたあの公園を通ると「カンッ」
と舌を鳴らす音が聞こえた。
振り返るとそこに信吾いた。

第三話 初体験

1992年 秋

公園で信吾と再会した彩子は久々の再会に少し照れながらまた初めてあった時のように信吾とたくさん話しをした。

信吾と会っていると嫌な事全て忘れることができる時間だった。

「寒いね。もうすぐ冬だあ。ほら手がこんな冷たい」

と信吾は彩子の頬に両手をそっとおいた。

彩子はドキつとした。男の人から顔を触れたのは初めてだ。顔が少し赤くなつたのを信吾は見逃さなかった。

「彩ちゃん顔赤いよ」

と信吾が言つと、彩子は

「そんな事ないよ」

と素早く言い返した。

「俺、寒いし俺んち行こっか」

と少し甘い声で信吾が言つた。彩子は言われるがままに信吾の家にいった。

信吾の家は団地で、母親と二人暮らした。昼間は母親が仕事で留守にしているので家に入ると誰もいなかった。そして信吾の部屋に入つた。信吾の部屋は6畳ほどの部屋で真ん中にこたつがあり横には万年寝床のように布団が弾いてありちらかっていた。

「寒いからこたつ入りなよ」

信吾はそういつてこたつ布団を少し開けた。彩子は信吾と向かい合わせにこたつに入ると信吾が足を伸ばし彩子のスカートの隙間の両内腿にピタッと足の裏をくつつけた。

「暖つけ。足冷えるから暖かくて気持ちよ。」

彩子は信吾冷たい足を少しずつ避けるように後ろへ下がった。そうすると信吾は寝そべるように足を伸ばした。

「逃げちゃだめたよ。寒いよ」

とまた甘い声で信吾は言った。

彩子は何変な事考えてんだろう。信吾は寒いだけなのにつて心の中で少し自分が恥ずかしくなった。

そうすると信吾は突然立ち上がり別の部屋に行った。二分程経ち信吾は部屋に戻り電気を消した。彩子はどこかに行くのかと立ち上がると信吾は彩子の前に立ち力強くキスをした。

初めてのキスに彩子はびっくりして目をつむった。

そして舌を絡ませ彩子の胸を力強く揉みそのまま布団に押し倒した。

「あつあたし初めてだから…。今日は帰るね」

と彩子と言つと信吾はズボンの上から自分の股間を握らせ

「大丈夫だよ。優しくするから」

といい服をぬがし彩子を素っ裸にした。

そして棚の上からワインを出し彩子の股間に注ごうとした。

「待つて。それはダメ」

と言つと

「みんなやつてるから大丈夫だよ。」

とまた甘く言つた。彩子は信吾のなすがままにされた。

そして彩子は処女を失つた。正直何とも思わなかった。SEXをする前は信吾に恋していたはずなのに終わった後は何とも思わなくなっている自分が不思議でたまらなかった。

そしてこの日から信吾の家に行く事もなくなった。

第4話 友情と裏切り

1993年 冬

彩子の同級生達はいよいよ来年の高校受験に備え、制服のスカートの丈を標準に戻しはじめたり、勉強に少しずつ力を入れ始める者がちらほら増えだした。

そんな中、彩子はますます見た目も派手になっていったが、学校の友達達とも今まで変わらずうまくいっていた。

日曜日に友達の葵と遊ぶ事になった。葵も日常のストレスからか彩子にパクリツアーに行きたいと告げた。彩子はあまり乗り気ではなかったが葵につきあった。

そして二人はある店へとパクリツアーに出掛けた。

いつもの大きな鞆を彩子は肩にかけ、店につくと葵がパクリをし彩子が持つ鞆の中にたくさんの下着や服を詰めた。

そして店を出ようとした時背後から彩子の腕を掴むある一人の女性が目立っていた。

「わかつているでしょう」

と声をかけた。

彩子と葵は振り返ると、保安員の女性だった。

葵の顔を見ると半泣きになっていた。

「二人共つい来て下さい」

を保安員は事務的に話した。その時彩子は頭の中で、いろんな事を考えた。葵は高校受験前だ。今ここで捕まってしまうと内申にひびいてしまう。もちろん彩子も葵と同様受験前だが彩子は顔を引き攣らせ、びびっている葵を見て、ある一つの決心をした。

「この子関係ないんで…あたしだけ行きます」

彩子は葵を庇い一人で捕まる事にした。そして葵に「大丈夫だから」

と言い、その場を後にした。

そして警察に連れて行かれ、2時間後、そこに葵の姿はなかった。

次の日、学校へ行くと学年中の人達、が彩子が万引きで捕まった事を知っていた。

葵に

「おはよう」

と、昨日何もなかったように声をかけると顔をそらし足早にかけていった。

彩子はまだ何も気付かなかった。2時間目が終わろうとする時、彩子は由利子から呼ばれた。

「彩子、最近何なの？葵に万引きとかさせてどういっつもり？」由利子はきつめに彩子に言った。続けて

「あんたがヤンキーなろうがどうでもいいけど周りを巻き込まないでくれる？葵、可哀相じゃん！」

つと言うと彩子は

「何で昨日事、由利子が知ってるの？」と聞いた。

「あんた知らないの？学年中、噂だよ。葵が彩子と買い物に出掛けたら彩子が万引きして葵も道連れになりそうになったって葵があんたが捕まって怖くなって、町田に偶然会ったから話したんだよ。」

（町田とは学年一のお喋り魔だ。こいつに言うと学年いや学校中に知れ渡るくらいのお喋りだ。）

そこで彩子は葵に裏切られたと確信しショックを隠しながらこう言った。

「あっそう。それは迷惑かけたね。ごめん…。葵にも言っというて」と彩子は由利子に本当の話をしなかった。今、本当話をしたとこでたぶん信じてもらえないだろうってわかっていたからだ。その日から由利子とも目を合わす事すらなくなった。

何とか中学二年は終わり、春を向かえ、三年になった。もう誰も彩子の側には近寄らなくなっていた。あの日から無視が始まり気が付くと彩子は一人になっていた。そして彩子は徐々に登校拒否をするようになっていた。

第五話 和也との出会い

1993年 6月梅雨

彩子は一人部屋でバイク雑誌を見ていた。そこでヤンキーの顔写真や文通コーナーに目が止まった。

一人の他県に住む美幸という同い年の女の子の友達になりませんか？とゆう募集欄だった。そこには電話番号が載っており、彩子は美幸に電話をした。

「もしもし」

と女の声で出た。

「あつあのゝ小泉といいますが美幸さんいますか？」

と彩子が言つと、

「あたしだけど」

と電話口の女は言った。美幸だっ！そう思い彩子は

「雑誌見たんだけど」

と話を切り出した。

美幸…

「あゝ。女からかかってきたの初めてだ」

彩子…

「そうなんだ。」

美幸…

「年、いくつ？」

と気軽に話を二人は次の日曜日に会う約束をした。

そして日曜日になり少し化粧し大人びた格好で出掛けた。待ち合わせ場所につくとそこには美幸らしき子は居なく10分経った頃前から背は低いが少し大人びた美幸らしき子が歩いて来た。二人は目が

合い、美幸が最初に

「だよな？」

と声をかけてきた。

「うん。美幸？」

と言うと美幸は頷いた。

そして二人は喫茶店に入りお茶をしながらお互いの話しをし夏休みに、美幸の家に泊まりに行く約束をした。

いよいよ美幸の家に泊まりに行く日が来た。少し大きめの鞆に服を詰め電車で2時間程かかる美幸の地元の駅についた。そこにはすでに自転車で向かえにきた美幸の姿があった。

その風景は彩子の住む街とは正反対のド田舎だった。見渡せば田んぼが広がるのどかな場所だった。

「遠かったでしょ」

そう美幸は彩子に言った。

「まあまあねつ。」

二人は自転車に乗り、美幸の家に向かった。美幸の家は一軒家で部屋は10畳ほどで広く綺麗に整頓されてある少し大人な部屋だった。一日、二日と過ぎ二人は毎日、夜遅くまで遊んだ。三日目、二人は夜中1時頃に駅前に行き一台の原付バイクを盗み二人乗りでその辺を走った。田舎の夜は都会は違い車などほとんど走っていない、二人はバイクで走っているだけでただ楽しかった。そこで美幸が、

「行きたいところがあるんだけど行ってもいい？」

とある集合住宅の団地へ向かった。美幸は好きな人の車を見に行つた。二人が帰ろうとすると後ろから五代のバイクが煽ってきた。暴走族だった。

暴走族に道を塞がれ一先ずバイクを止めた。

バイクに乗っていた男達もバイクを止め、近寄ってきた。そして今から遊ぶ事になった。男は全員で5人いた。

そして男の一人がシンナーを配りはじめた。もちろん彩子も美幸も

吸う事になった。ある一人の男が彩子を見て一目で気に入った。彼の名前は和也。

そして美幸の事を気に入った男もいた。みんなで美幸の男の家に行き、浴びるほどシンナーを吸った。そして和也と彩子は付き合う事になった。それから彩子と美幸は家に帰ることなく、10日ほどその家に居続けた。毎日、シンナーを肌身離さずもちSEXをする日が続いた。

そんなある日、団地内で警察がうるつきはじめた。仲間の一人の男が警察の様子を見に行くと、

「捜索願いが出てるがこの二人を知らないか？」

と聞かれたらしいが知らないフリをし戻ってきた。

暫くすると警察の姿はなくなり、その夜みんなで暴走しに行く事になった。

暴走の途中、休憩をする事になりある神社に忍びこんだ。そこは壁一面に遺影のような物が飾ってあった。そこでもシンナーを吸いながら、彩子と和也はSEXをした。1993年7月30日の出来事だった。

そして次の日、彩子と美幸は一先ず美幸の家に帰る事にした。美幸の母親に二人で頭を下げ謝ると、美幸の母親は許してくれた。

そして美幸の母親は

「今日は晩御飯してないから、駅前で食べておいで」

とお金をくれた。ただし、そこには条件がありバイクには乗らずに自転車で行く事だった。だか彩子と美幸は守らずに隠しておいたバイクで御飯を食べに行く事にした。そして美幸の運転で彩子は後ろに跨がり、バイクを走らせた。

ガッシャーッ！！

車に跳ねられ事故を起こしてしまった。

ふっと彩子が目を開けるとバイクから10m離れたところに跳ね飛ばされたが無傷だった。走ってバイクのどこに行くと美幸に

「早く逃げよう！」

と彩子は美幸を揺さぶった。美幸は後頭部から血を流し

「ムリ……」

と気弱な声で言った。

彩子は電話BOXに行き救急車を呼び、美幸の男にも電話した。救急車に乗り、病院に着いた。美幸は頭が切れただけで対した事はなかった。待ち合い室に行くと、和也や美幸の男や他仲間達が10数人座っていた。

そこには彩子の親や、美幸の親もいた。彩子は和也と交わす言葉もなく親に連れて帰られた。この日を最後に和也と会う事はなかった。数日後、和也に電話をすると別れを切り出され、彩子と和也は別れる事になった。もちろん美幸ともこれが最後となった。夏休みはあつという間にわずか残り一週間となった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4154a/>

トラブルメイカー

2010年11月14日08時57分発行